



児童文学に触れて育む深い感受性

神戸親和女子大学 文学部教授 笹倉 剛さん

絵本の読み聞かせや読書が、子どもの成長に大きな役割を担うと言われて久しいですが、実際に絵本や図書に接する機会は少ないというのが実情です。そこで今回は、図書館学や子ども読書を専門に研究されている笹倉剛先生に、本を読むことの大切さと、それに親しむための工夫をお話していただきました。

児童文学に触れることで育まれる深い感受性

学生さんに対して、かなり本を読むように指導されているようです。

毎日新聞の子どもの読書調査（2010年）によると、不読者（1か月に1冊も本を読まない者）は、高校44%と率が高いようです。最近になって、確かに少しは読むようになってはいますが、奥深く考えて読むこと、質の高い本を読むことについては、依然、課題が残っているのが現状です。

私は文学部の学生には、本を1000冊読むように指導しています。そして、読書カードを作成し、どんな本を読んだのかを書いてもらっています。記録する内容は、本のテーマ、キーワード、印象に残った箇所、感想などです。当初、感想を書くことは考えていなかったのですが、文章で表現するのも良いことなので実施しています。

併せて、読書会も開催しています。この試みはともよかったですね。読み方が奥深くなりますから。同じ本を読んだ学生に、順番に発言してもらい、

ささくら つよし

1950年、兵庫県生まれ。1983年、兵庫教育大学大学院 領域教育専攻自然系コース修士課程終了。兵庫県立図書館主任調査専門員などを経て、現在は、神戸親和女子大学にて教鞭を執る。専門分野は図書館学、図書館情報学、学校図書館、子ども読書。



感想を述べ合います。本について得た情報を交換し、他の人の意見を聞くことで読みの深さや味わい方の違い、本の面白さを再認識。そうすることで、もう一度読んでみようという意識も芽生えてきます。読書会は小・中学生の子どもにもお勧めだと思います。

本学でもそうですが、学生は、阪急電車（有川浩作）のようなベストセラーはよく読んでいます。しかし、読みやすいものばかりでなく、昔ながらの名著も、もっと読んでほしい。そういう読書習慣が抜け落ちているか

ら、読後の感想を聞くと、どうしても薄っぺらいもので終わってしまった感じになります。読み終わった後に手元にずっと置いておきたいと思えるような、重みも深みもある本を読んてほしいと思います。

先生は以前から、推薦図書をもとめておられますね。

『たのしい絵本箱』という絵本推薦冊子は、私が図書館で働いていた時にまとめたものです。子どもには絵本や児童文学が重要だと思い、児童書に卓越した司書と共に約200冊の子どもに読んでほしい本のリストを作成。3200部ほど、神戸市と兵庫県の小学校や幼稚園などに配りました。

推薦図書といえば、図書館学専攻の学生には、課題図書のリストを作つて渡しています。リストの中身は、絵本300冊、児童文学初級の本100冊、中級の本100冊。『ゲド戦記』や『三国志』なども含まれています。

実際のところ、児童文学は、今の学生にはあまり読まれていません。読んてはいても、原作ではないケースが多いのです。『不思議の国のアリス』の

ダイジェスト版を読んだとか、ディズニーの映画で知っているとか。しかし、やはり原作を読んでほしい。そうでなくは、本当はどんな物語なのかから知らないままになってしまっています。

特に、現在私が教えている学生は、女子大生ですからね。将来、お母さんになったときに、自分が本を読んでいるのと読んでいないのでは、子どもに接する際に大きな差ができてしまいます。本を読んでいる人は、良い本に出会うと、「子どもにも読んでもらいたい」「知ってもらいたい」という気持ちが出てくるものですから。自然と子どもに読み聞かせをしたり、絵本を開いたりするきっかけができるでしょう。私自身の経験のなかでも、たくさんの本を読み聞かせた子とそうでない子は、やはり感受性が違うと感じます。できるならば、感受性・感性が豊かになればと思いますよね。

では、実際にはどこでどんな本を選べばいいのでしょうか。

本の選定は、確かに難しい点だと思います。ですので、ぜひ、図書館を活用してもらいたいです。図書館にある

本は、「選書」されているものばかりだから、子どもが読む本としては安心できるものが多いです。

ただ、実際のところ、現在の日本は、図書館の数が絶対的に少ないです。北欧のように、長い冬の間は家族で図書館へ行って過ごす、というような文化も根付いていません。ヨーロッパ、特にフィンランドなどは、本のある暮らしができる伝統があたりまえのようにあり、その結果として読書力も学力も高くなっています。

日本では、石川、山形、秋田などは図書館や学校図書館が充実しているほうですが、それでもやはり、日本は図書館が圧倒的に少ないですよ。イギリスでは、どこに住んでいても、たいてい自転車で行ける距離に図書館があります。日本のように、電車で行かなくてはならないようでは、足も向かなくなりやすいですね。

同じアジアの国でも、韓国ではもっと「読む」という文化に重きを置いています。日本に比べると、随分進んでいるのです。

この差は、なによりも家庭にあるようです。我が国は、「子育ては女性の

ものだ」という価値観が強く、ヨーロッパや韓国とは、家庭環境が違います。

私は図書館に勤めていたから、子どもに読み聞かせをしましたけれど、ほとんどのお父さんはしませんね。しかし、それはとても残念なことなのです。

九州の小倉にお住まいの理容師さんの例ですが、お父さんが2、3歳のお子さんに毎日読み聞かせをしていたところ、子どもの語彙や落ち着きが目に見えて変わってきたそうです。お父さんは大変驚いておられました。思いがけず子育ての面白さを実感できたと言って喜んでおられました。

さて、どんな本を選べばよいのかですが、感性を磨くことのできる良い本はたくさんあります。

私が思う「子どもに読んであげたい本」の目安は、25年以上読み継がれてきた本です。それくらい経てば評価も固まってきます。毎年たくさんの本が出版されては消えますが、残って定着する本は、やはり上質なものが多くです。時々、驚くような有名な画家が絵を描いている本もありますから、そんなところも注目してみてください。

年齢に関係なく 絵本や児童文学は楽しめる

一般に、絵本は小さい子どものもので、思いがちですが、そうではないのでしょうか。

絵本は、大人も楽しめます。読む年齢によって、抱く感想がまったく違うものです。例えば、谷川俊太郎の『あな』などはそれが顕著に出る面白い作品です。実際に読み聞かせしてみると、小学校1年生と中学1年生では、出てくる感想がまったく異なっていました。それぞれの立場と年齢で感じ方、捉え方が違ってくるでしょう。

そして、何よりも大きいのは、フィクション（創作）を読むことの意味です。『わすれられないおくりもの』（スーザン・バレイ作）という絵本をご存知でしょうか。これは、森の仲間によくを教えてくれたアナグマが亡くなったという物語です。彼がいなくなった後、森の仲間はとても哀しみますが、次第に思い出や残された知識、価値観が自分たちの身の回りで思っていることに気づいていきます。

このようなフィクションを読むこと

で、知らず知らずのうちに、また経験していないことを学べることが、絵本や児童書に触れる大きなメリットです。物語の中に入り込むことで、経験していなくても疑似体験できるというのは、他ではなかなかありません。

不思議なことに、子どもは、力のある物語を見分けることができます。名作を読むと、食いつき方が違うのです。子どもはフィクション、ファンタジーと呼ばれるものの中から、面白さや意味をしっかりと感じ取りますから、それを大切に育ててあげてください。

家庭ではどんなことから始めるといいでしょうか。

本は、意識して触れる機会を作らなければ、なかなか身近なものになっていきません。しかも、いきなり本を買おうと思うと、とても高額になってしまいますから、読書の入り口はぜひ図書館で。それでこれは手元に欲しい、と思ったものだけを買うようにするといいでしょ。近くに図書館がない場合は、学校図書館を利用しましょう。ブックモービル（移動図書館）がある地域ならば、活用するのもいいですね。



可能ならば、1か月に2回くらいは図書館を利用するような習慣をつけてほしいところです。一般に、貸出期間は2週間ですから、それくらいのサイクルで利用できればちょうどよいのではないかと思います。

そして、9時以降はテレビを消すと、生活の中でも少し意識できるとベストです。参考までにお話すると、今トーンが「家読」というものを進めています。

少し前から、学校で授業が始まる前の時間を利用して好きな本を読む「朝読」が定着してきました。そこで今度からは、家の中で、家族みんなで本を読む新しい読書スタイル「家読」をしようというのです。そして、読んだ本については、家族で話す。とてもよい習慣だと思えます。そして親御さんは、子どもに「感想を求める」のではなく、どうだったかを「話し合う」ようにしてください。読後にきちんとした感想を求められると思うと、読む際に身構えてしまいますから。

現在は、物語を撰取するのも、安易な方法に流れがちです。映画やDVDなどの映像で取り入れると、苦勞なく

話の概要を受け入れられますから。でも、それでも本は読んでほしい。映画などの映像媒体が、本の面白さ、奥深さに勝てることはないからです。

例えば、「むかしむかし、おじいさんとおばあさんが」と書いてあったら頭の中に思い描くおじいさんとおばあさんは、人それぞれですよ。着物を着て帽子を被っているかもしれないし、近所のおじいさんにそっくりなイメージがもしれない。つまり、自分で自由にイメージを広げられるというのが本の特徴です。

その例として、宮沢賢治の作品などは、完全なビジュアル化は不可能と云われますよね。天文の知識、鉱物の知識、言葉遊びの要素、そして世界観。絵本にすることさえ難しいという人がいるくらいです。

棕鳩十は、子どもの本には一番身近でわかりやすく感動を伝えるものがある、と言いました。子どもに感激、感動をもっと伝えなくてはいけない。そして、それが最も簡単に実現できるのは本である、と。この「本」という身近なツールに、誰もがもっと親しめるようになってほしいと思います。

笹倉先生オススメ

夏休みに読んでほしい本

学年は目安です。

低・中学年にオススメ



火よう日のごちそうはひきがえる
ひきがえるとんだ大冒険シリーズ 1
作：ラッセル・E・エリクソン
絵：ローレンス・D・フィオリ
訳：佐藤 涼子（評論社）

中・高学年にオススメ



エーメールと探偵たち
（岩波少年文庫）
作：エーリヒ・ケストナー
訳：池田香代子
（岩波書店）

中・高学年にオススメ



精霊の守り人
作：上橋菜穂子
絵：二木真希子
（徳成社）

オススメ絵本



木を植えた男
作：ジャン・ジオノ
絵：フレデリック・バック
訳：寺岡 義
（あずなる書房）